シミズ谷城跡下層の竪穴状遺構について

柴　暁彦

1．はじめに

シミズ谷城跡は、丹後半島の内陸部に位置する竹野郡弥栄町に所在する16～17世紀にかけて存続していた山城である。この山城の築かれた場所は町内を蛇行しながら北流する、竹野川の流域右岸からやや奥まった山塊の、東西に連なる独立丘陵上である。

調査の契機は丹後国営農地開発事業による。調査は丘陵最高部の主郭部分とその西側に続く二段の階段状の曲輪部分が対象となった。調査開始当初、地形確認の段階で丘陵東端は、昭和期の畑作による開墾で、丘陵の一部が削り取られ、その断面に薄い炭化物層を介して2時期の遺構の存在の可能性が考えられた。調査の結果、主郭では、礎石建物跡や小型鍛冶炉などの遺構を確認した。また、下層では、平面形が隅丸長方形を基本とする竪穴状遺構[注1]を9基検出した。

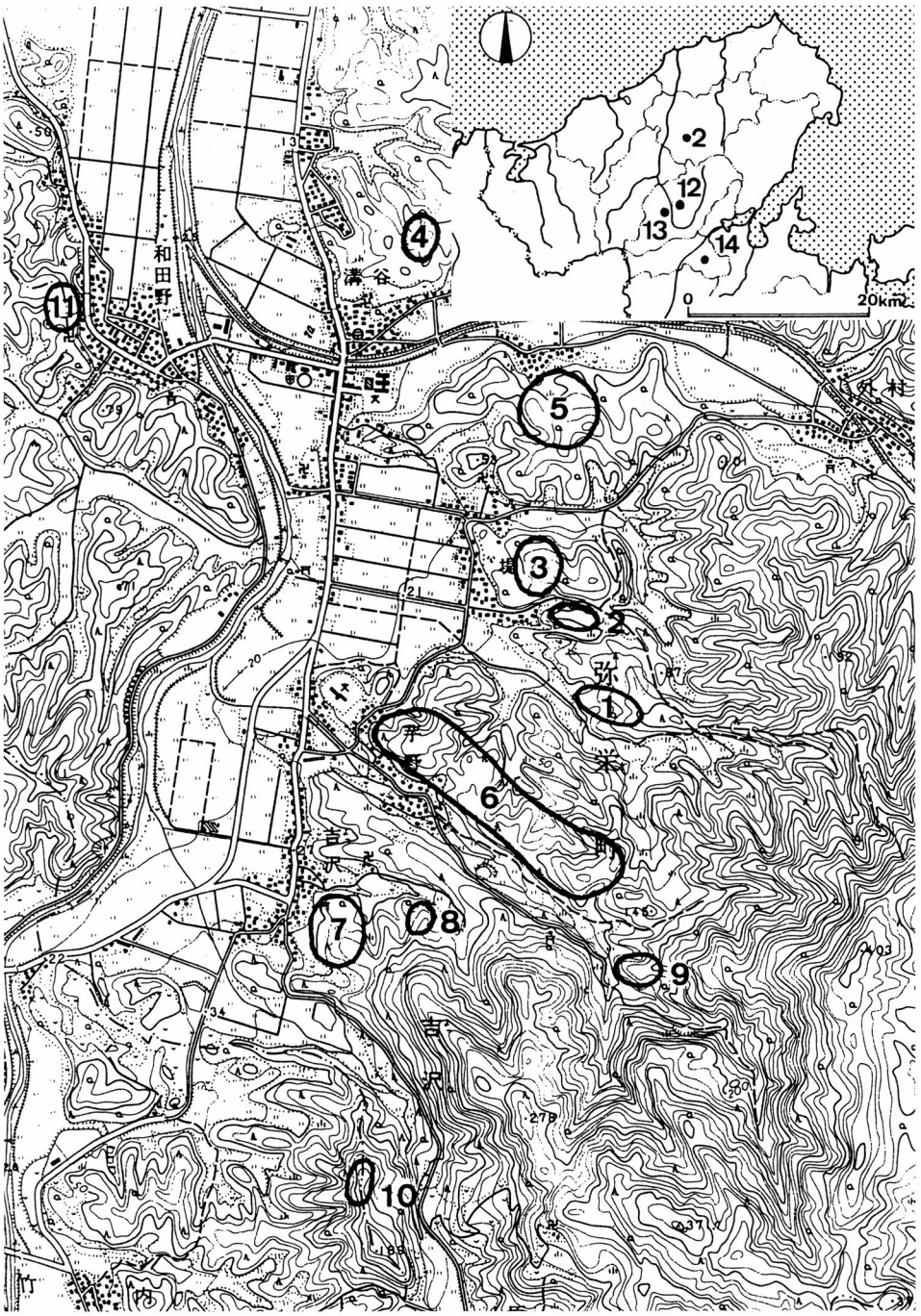
下層で確認した遺構について、調査時点では、古墳の墓壙状の遺構といった感覚でさほど気に留めず、概要報告でも事実報告にとどめていた。調査後、遺構埋土中で確認された冑の八幡座金具を鑑定していただき、八幡座金具単体で坑内に存在した可能性のあるとの御教示を得た。このことから、遺構の性格は、その他の金属製品が多数出土したことから、金属製品の貯蔵穴であることも考えられた[注2]。

従来、こうした形状および規模を持つ遺構は遺物に骨や銭貨などを共伴するものとして、墓または貯蔵穴として認識されている。

しかし、①当遺跡のように金属製品を湿度のある地中に貯蔵するか、また、②金属として再利用するには出土総量が少ない。③確認した遺構の中に小鍛冶遺構が2か所検出されただけであり、鍛冶関連の遺構・遺物が少ない、など問題点が見られるため、検出遺構の機能の検討を試みるものである。

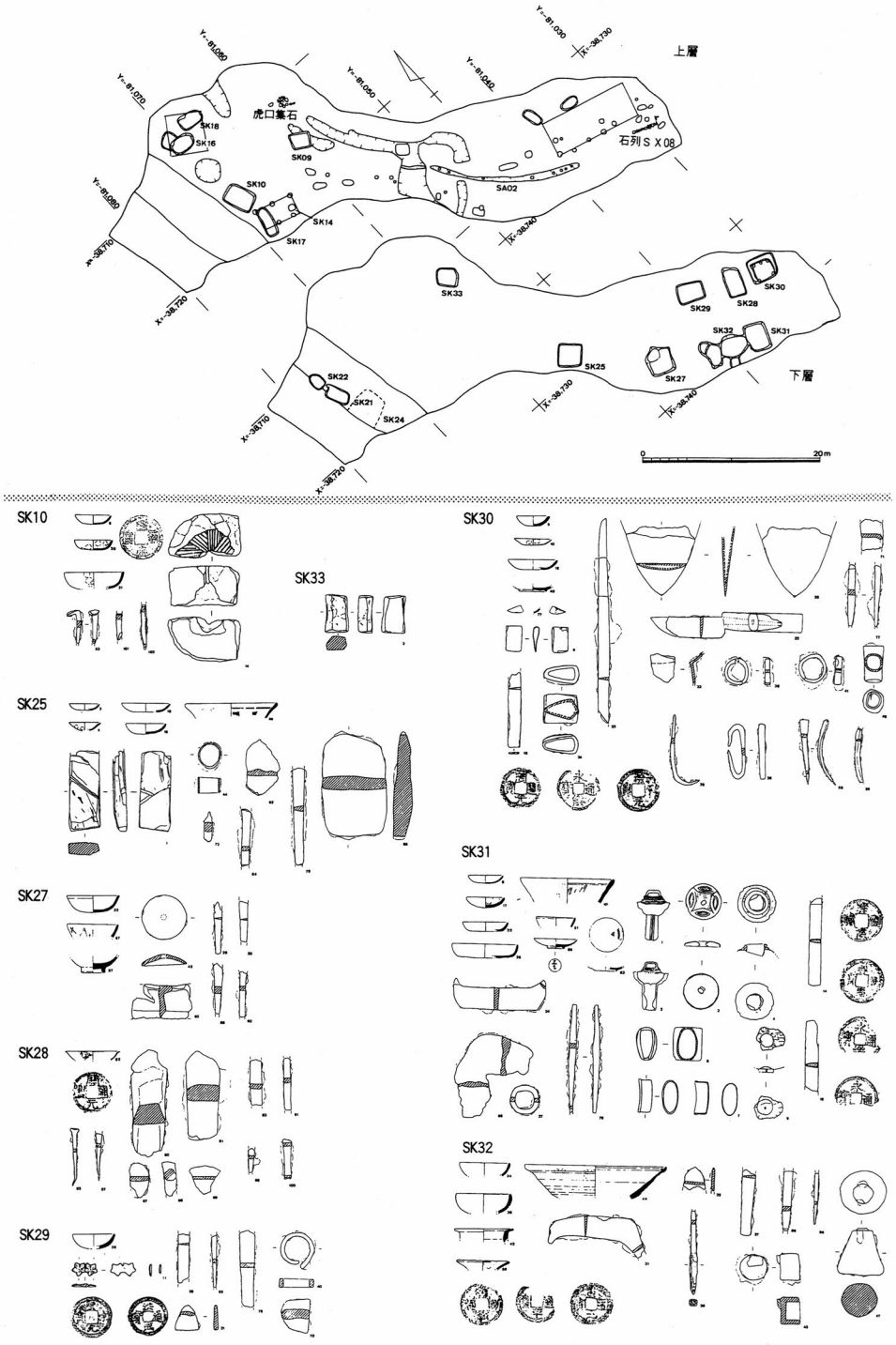
2．遺構の概要

確認した竪穴状遺構は主郭部分の上層で1基、下層で9基の合計10基を確認した。遺構は部分的に接するように切り合い関係を持つものも見られるが、おおよそ遺構同士は一定



第１図　調査地位置図及び周辺の遺跡分布図

1. シミズ谷城跡（Ａ地点）　2. 小屋ヶ谷城跡（Ｂ地点）　3. 堤城跡（Ｃ地点）　4. 溝谷城跡
5. 立山城跡　6. 芋野城跡　7. 吉沢城跡　8. 菩提城跡　9. オテ坂城跡
10. 高山城跡　11. 和田野城跡　12. 左坂横穴　13. エノボ横穴　14. 古屋敷横穴



第２図　検出遺構平面図及び関連遺構出土遺物

第１表　検出遺構一覧表(規模の単位はｍ)

遺構名	規模(長軸×短軸×深さ)	主軸方向	主な出土遺物
ＳＫ10	3.2×2.2×1.2	N19°Ｅ	土師器皿・瀬戸・美濃灰釉皿・茶臼・小柄・茶臼・銭貨
ＳＫ25	2.8×2.2×1.4	N45°Ｗ	土師器皿・砥石・刀子・鍛造鉄塊・炭化米
ＳＫ27	2.9×2.8×1.7	N24°Ｅ	土師器皿・青磁碗・鉄釘・鉄鍋片
ＳＫ28	3.2×2.0×1.6	N25°Ｅ	染付・鉄釘・不明鉄製品
ＳＫ29	3.1×2.1×1.8	N66°Ｗ	土師器皿・青銅装飾品・環状鉄製品・銭貨
ＳＫ30	3.1×2.7×1.9	N66°Ｗ	土師器皿・刀・小柄・鋤先・庖丁・銭貨
ＳＫ31	3.1×2.1×1.8	N21°Ｅ	土師器皿・青磁皿・白磁皿・擂り鉢・銭貨
ＳＫ32	3.1×2.8×1.4	N67°Ｗ	土師器皿・鉄鎌・銭貨
ＳＫ33	2.1×1.9×1.2	N44°Ｗ	砥石

の間隔を持ち、曲輪平坦面の縁辺部に掘削されている。各遺構の配列は、尾根の主軸に対して長軸方向が平行するものや直交するものが見られるが、規模は長辺２ｍ、短辺1.9ｍ、検出面からの深さ1.2ｍ以上を測り、ほぼ同一と捉えて良いと思われる。いずれも丹後地域で普遍的に見られる、花崗岩の岩盤を掘削しており、平面的には感触の差こそあれ、埋土と岩盤の色調の差は認められなかったため、時間を置かず人為的に埋め戻されたものと思われる。また、いずれも坑内の堆積土に空間はなく、横穴状の主室空間が存在した痕跡や木棺等の腐朽による落ち込みは確認できなかった。

３．遺構の分析

確認した各遺構において出土遺物の上での共通点は、土器を伴うことと、鉄釘以外の金属製品を持つことである。

逆に遺構の規模以外の形態にはそれぞれ独自性を持つ。

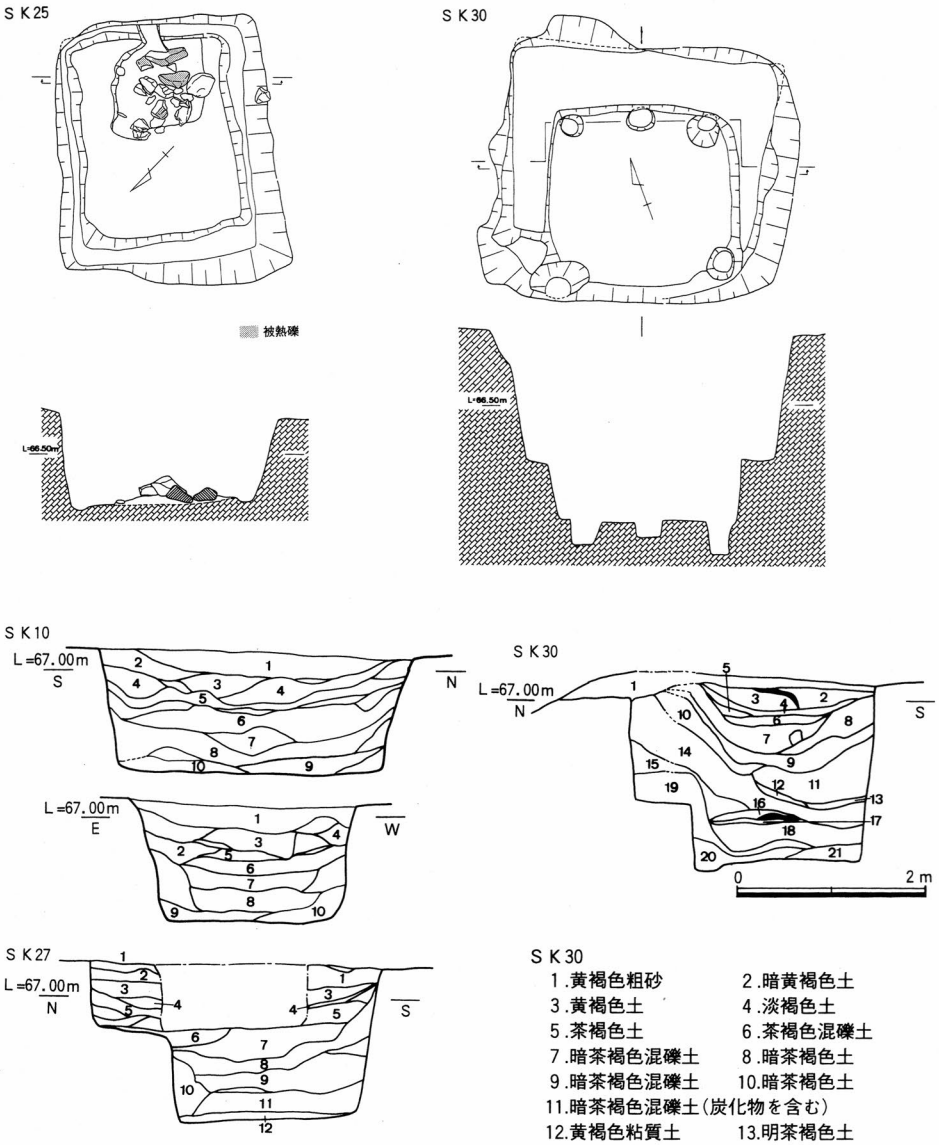
１．素掘で床面の平坦なもの。ＳＫ10・27・29・31・32・33

２．壁溝状の溝がめぐるもの。ＳＫ25

３．床面に上屋を想像させる柱穴を持つもの。ＳＫ28・30

特にＳＫ25の例は、図示した遺物のほか、埋土中に人頭大の角礫が100個程度投棄されており、その大半の礫が被熱、赤変していた。また、礫下層の埋土には多量の灰が混入していた。しかし、壁面及び床面は熱を受けた痕跡は見られず、この遺構以外の場所で使用され、礫および灰が廃棄された土坑と思われる。

３の２例はＳＫ28が１穴、ＳＫ30が５つの穴を確認した。前者は土坑南側の短辺のほぼ中央に直径15cm程度の穴が開けられていた。床面上部には人頭大および一抱えほどもある礫が投棄されていた。この土坑も坑自体被熱痕跡は確認できなかった。



S K10
1.暗黄褐色粗砂　2.黄褐色粗砂
3.黄灰褐色粗砂　4.黄灰色粗砂
5.暗茶褐色粗砂　6.黄褐色粗砂
7.暗黄灰色粗砂　8.黄褐色粗砂(茶色粘質土塊を含む)
9.暗茶褐色粗砂　10.暗茶色粗砂

S K 2】
1.黄褐色粗砂　2.黄白色粘質土
3.灰色粘質土　4.灰色粘質土(粘土を含む)
5.灰色混礫土　6.黄褐色混礫土
7.黄褐色混礫土(粘性あり)
8.黄褐色混礫土(炭化物を多量に含む)
9.淡褐色混礫土(炭化物を含む)
10.暗褐色混礫土　11.暗灰褐色混礫土(炭化物を含む)
12.暗茶褐色土

S K 30
1.黄褐色粗砂　2.暗黄褐色土
3.黄褐色土　4.淡褐色土
5.茶褐色土　6.茶褐色混礫土
7.暗茶褐色混礫土　8.暗茶褐色土
9.暗茶褐色混礫土　10.暗茶褐色土
11.暗茶褐色混礫土(炭化物を含む)
12.黄褐色粘質土　13.明茶褐色土
14.淡茶褐色土(粘土塊を含む)
15.淡茶褐色土　16.暗茶褐色土
17.茶褐色土　18.茶褐色(粘土を含む)
19.灰褐色土(粘土を含む)　20.灰褐色土
21.暗茶褐色土(灰を含む)
※(黒塗りは炭層)

第3図　検出遺構実測図

ＳＫ30は床面から約40cm上部に幅約40cmの「コ」字状の犬走りが設けられ、南西隅には内部に降下するためと思われる地山を掘り残した足掛かり部分が確認できた。さらに床面には北側長辺に３つ、南側に２つの柱穴が設けられており、10基の中では唯一貯蔵穴と言えるような構造的特徴を有していた。

４．地下式壙の分布

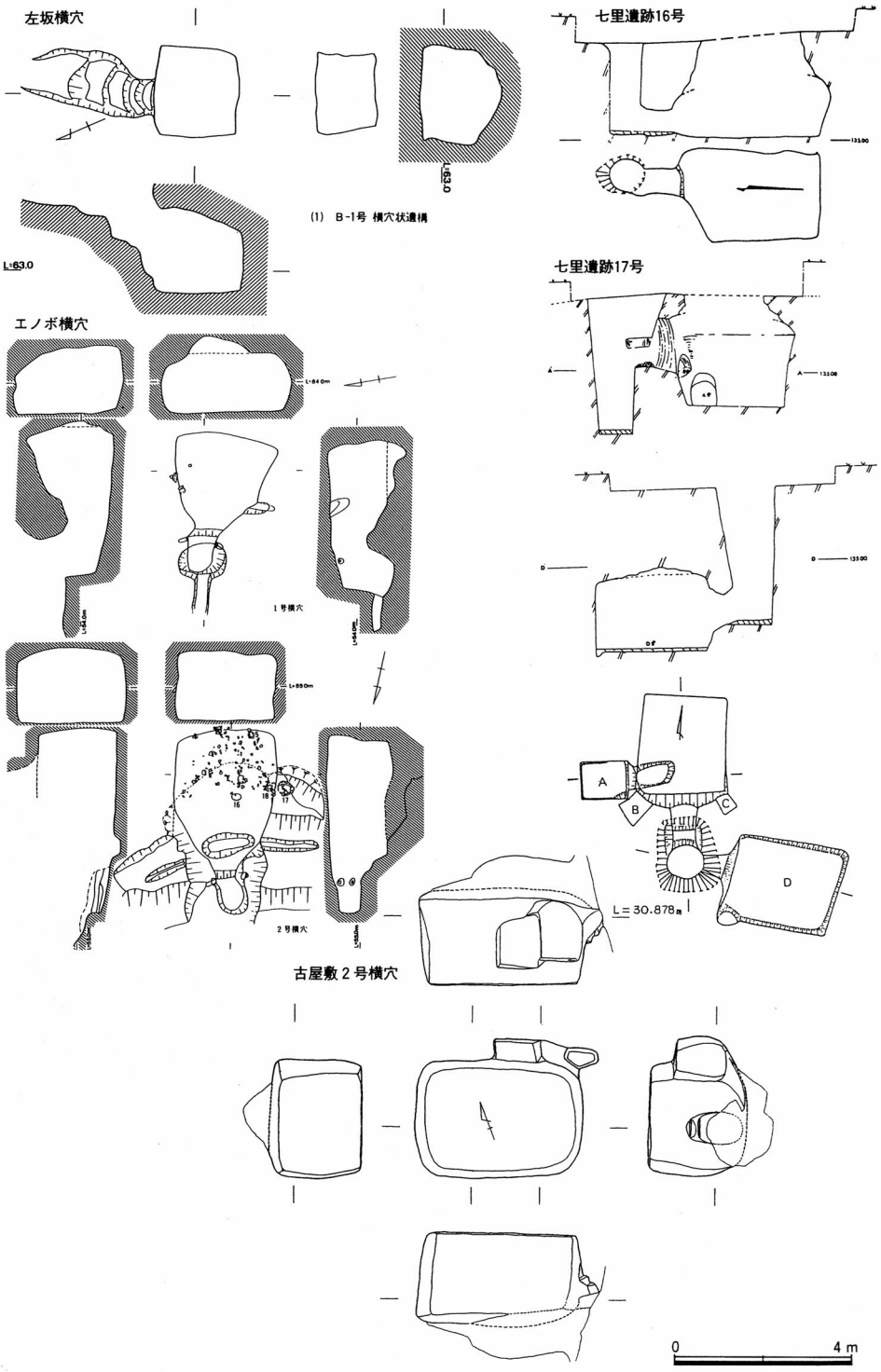
地下式壙の分布は東京・千葉・神奈川を中心とした南関東に集中する。また、長野・山梨・岐阜の中部山岳地帯にも散見されるようである。近畿地方周辺では、石川・福井といった北陸地方にみられる。石川県羽咋市の気多社僧坊跡群の報文中の寺家横穴は構造を見る限りでは、羨道を持つ横穴墓であり[注3]、関東で確認されているものとは異なり、地下式壙とは言えない。

滋賀県の湖北・湖東地域にもわずかであるが類例がある。蒲生郡竜王町の七里遺跡では、２基が調査され、関東で確認されている竪坑と玄室といった構造が見られる[注4]。この例は関東地方で見られる地下式横穴と同様のものと思われる。

山陰地方には同様の規模を持つ遺構が中原地下式壙群などで確認され、内部から人骨・銭貨・鉄釘などが出土しており、明らかに土壙墓と言えるものが確認されている[注5]。

丹後地域では、飛鳥～奈良時代に横穴墓が造られており、中郡大宮町エノボ横穴、同左坂古墳群Ｂ１・２号横穴状遺構、峰山町宮谷横穴状遺構、与謝郡野田川町古屋敷横穴状遺構などがある[注6]。エノボ横穴例は横穴内の堆積土上面からの出土土器から、横穴の構築時期が飛鳥Ⅰ～Ⅱ型式に遡る可能性もあるようであるが[注7]、時期・構造上から見ても横穴墓であり、中世の遺物の出土については再利用されたものとの見解で相違ないものと考えられる。また、古屋敷横穴墓群は３基が確認されている。横穴の立地はいずれも丘陵端部であり、３基のなかで２号墓が発掘調査されている[注8]。横穴の形態は竪坑から階段を経て、主室に導入するものであり、半田堅三による分類[注9]の有段Ⅱ類Ｂに該当するものである。

丹後地域で見られる、これらの遺構は、構造形態としては竪坑から主室へ導入する、南関東で普遍的に見られる、地下式壙と類似する点も見られるが、これらの横穴の占地は丘陵および尾根の斜面あるいは端部であり、構築された場所が異なっている。また、古墳時代の横穴とともに検出されている例が見られることから、平坦面を掘り下げて構築する地下式壙とは異なり、関東地域の地下式壙とは別系譜であり、横穴墓を再利用ないしは模倣したものと考えたい。この点では、石川県の気多社僧坊跡群報文中の寺家横穴例と共通する。類例は少ないものの、北陸・丹後地域は、中世段階において、丘陵および丘陵端部を利用した横穴が構築される場所といえるかもしれない。現在の確認事例から、地下式壙は


左坂横穴
(1) B-1号 横穴状遺構
L=63.0
エノボ横穴
1号横穴
2号横穴
七里遺跡16号
七里遺跡17号
A
B
C
D
L=30.878m
古屋敷2号横穴
0
4 m

第4図　遺構実測図

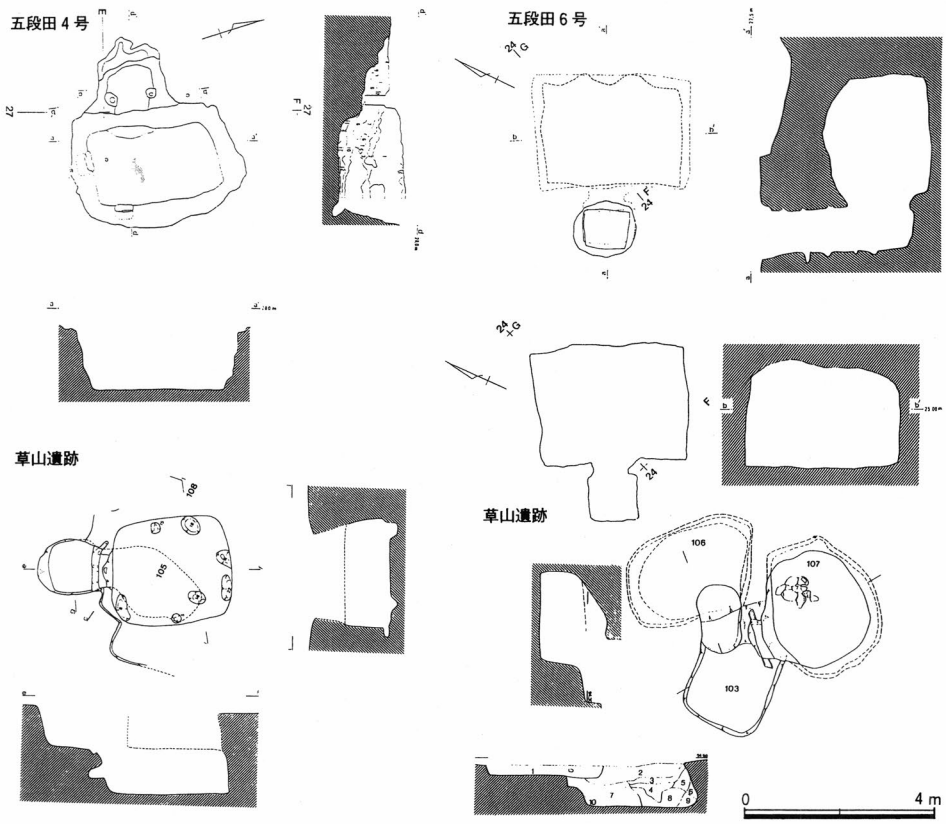
日本海側を中心とした地域に普及が見られたものと考えられる。しかし類例が少なく普遍的なものとはいえず、遺跡の立地を見ても、この地域独自の発達があったといえるかもしれない。

いずれにせよ、シミズ谷例と同様の類例の求められない現状では、シミズ谷城跡で検出した遺構は特異なものと位置づけるしかない。

５．遺構の機能について－他地域の地下式壙との比較－

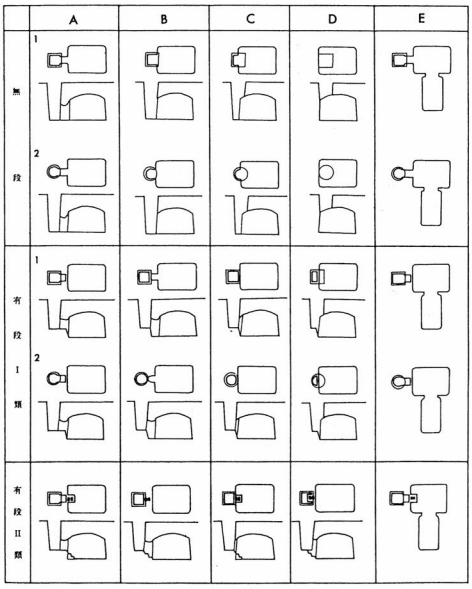
(1)遺構の構造面からの検討

遺構の機能については墓壙・貯蔵穴といった２説が有力である。検出例の多数見られる関東では、出土遺物に板碑が見られることから、仏教との関連を持って、墓壙説が主力である。その中で関東の五段田遺跡・多摩ニュータウンNO.457遺跡では遺存状況が良好な地下式壙が多数検出されている。挿図では天井部が残存するものと崩落したものを掲載した。天井部の残存しているものはもちろん、主室の横穴天井部が崩落しているものの壁面の状



第５図　地下式横穴実測図

況はいずれも持ち送り状のカーブを持っており、断面形はいわば腰高のカマボコ型を呈している。しかし遺構の形状から見る限り、当遺跡の遺構の壁面の立ち上がりはほぼ直になり、天井部を支えるような持ち送り構造が壁面には見られないこと、ＳＫ25は天井部が存在すると多量の礫の堆積が人為的に積み上げない限りほぼ水平にならず、土層の堆積状況から判断すると、上部から投棄したものと考えられる。



第６図　地下式壙形態模式図(注９文献)

また、ＳＫ30のように底部に上屋を構えたと見られる柱穴が５つ存在することなど、天井部が存在した可能性を否定する事実が確認されていることから、少なくともＳＫ25および30は竪穴状の遺構であると判断したい。

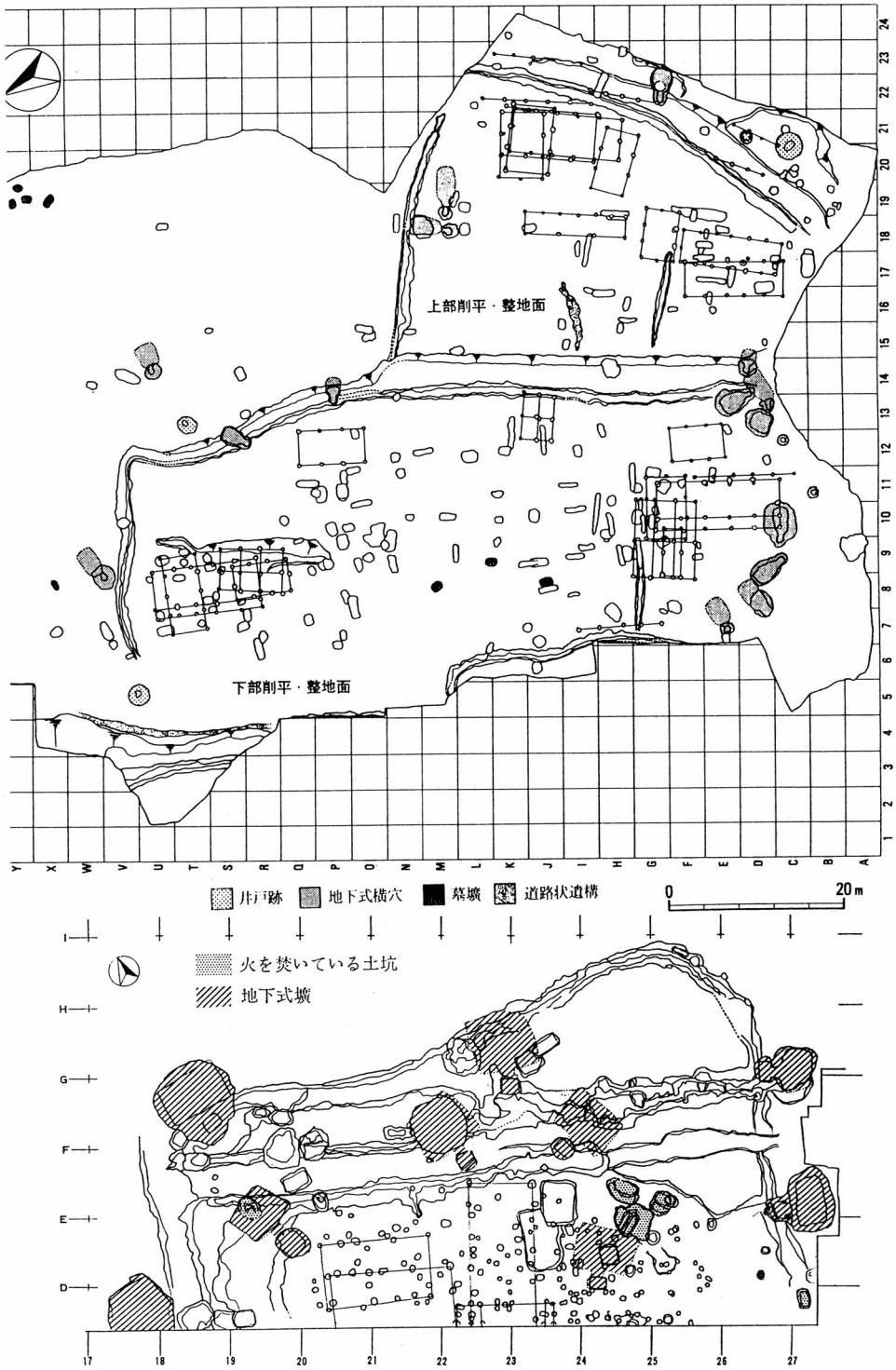
また、上記以外の遺構も天井部分は残存しないが、遺構掘形および平面形状から、関東での調査例をもって天井部分が崩落した横穴状遺構と考えられなくもない。

ＳＫ27は遺構の北西角に一段、段差がつき本体部分がある。ＳＫ32も南側に通路ないし溝状の掘り込みがある。いずれもかなり竪坑部分が浅いが、有段構造を持つ横穴と捉えられなくもない。

しかし、関東での調査例による土層堆積状況を見ても、多摩ニュータウン例は下層に天井崩落土の認識があるが、五段田例は確かに上層堆積土は比較的大きなブロックで入り込んでいるものの、構築された地質や崩落時期で堆積状況は変化するようであり、一概に土層の堆積状況では判断できない可能性もある。こうした前提のもとで、ＳＫ10およびＳＫ27の土層堆積状況を見ると、まとまったブロック構造での土層の堆積状況は見られず、時間の経過とともに徐々に埋没した状況であり、もとは天井部が存在し、崩落したという判断は下しにくい。

(2)出土遺物からの検討

ＳＫ25は坑内から60数点の人頭大の被熱礫や盤状鍛造鉄塊が出土し、ＳＫ30では銭貨や鉄釘の出土があり、墓の要素が考えられるものの、一方で鋤先や庖丁、釣り針などや環状の鉄製品などの出土があり、一概に墓と判断できない要素が見られる。そのほかの遺構の出土遺物についても金属製品はリサイクルのための素材と考えられる一面も見られる。ただし、リサイクルするためには大量の素材が必要となるはずであるが、土坑から出土した



第７図　遺構分布状況(参考文献①・②)

総量は多くない。

関東地域の地下式壙からの出土遺物と比較すると、この遺構の帰属時期の位置付けが不明な場合が多いことから見ても、出土遺物がほとんど見られないものが多い中で、当遺跡例はある程度まとまっているといえる。この点から判断しても遺構の機能が異なる可能性が高い。

6．まとめ

地下式壙は南関東に集中し、シミズ谷城跡と同様に山城の下層遺構として確認される例が多い。近畿地方周辺においては北陸・山陰といった日本海側に集中しており、尾根上の調査における不時発見の遺構としてであり、山城の調査において確認された例を聞かない。唯一、関東地域との類例に近いといえば滋賀県の七里遺跡例である。

このように考えると近畿地方において類例が求められないこと、構造面、遺物の豊富さから判断して、シミズ谷城跡で検出した遺構は関東のものと共通するとは言いがたいが、仮に同一の遺構と仮定した場合、機能を考えると貯蔵穴であると位置づけたい。しかし、丘陵全域を調査していないため疑問もあるが、墓壙ならば丘陵頂部に占地することも理解できるが仮に貯蔵穴とした場合、この部分に貯蔵穴のみを掘削するかという問題がある。こうした場合は五段田例・多摩ニュータウン例のように、一連の遺構として、シミズ谷上層・下層遺構を捉えると説明が付く。いずれにせよ、丹後地域での類例を待って再度検討したい。末尾になったが、京都府教育委員会ならびに野田川町教育委員会の方には大変お世話になった。記してお礼を申し上げたい。

（しば・あきひこ＝当センター調査第２課調査第３係調査員）

注１　「竪穴状遺構」の名称は、竪穴式住居跡に類似する遺構と誤解を受ける可能性があり、広義で貯蔵穴を意味する土坑・貯蔵穴が適切かもしれないが、機能面で不明な点が多いため、この名称とした。

注２　表面に金箔が残り、残存状況が良好であることから、墓に副葬されたものであれば、装着金具全体が良好に残る筈であるが、この金具自体に漆皮膜が付着せず、金具として装着されたものではない。京都国立博物館学芸員　久保智康氏のご教授による。

注３　「羽咋市気多社僧坊跡群」（『能登海浜道関係埋蔵文化財調査報告書』Ⅳ　石川県立埋蔵文化財センター）　1984

注４　小野久隆ほか　「日野川流域の考古学的調査　七里遺跡」（『陵』２号　仏教大学考古学研究会）1974

注５　田中精夫ほか「鳥取県と埋蔵文化財シリーズ４　歴史時代の鳥取県」（鳥取県埋蔵文化財セン

ター）　1989

注６　肥後弘幸ほか　「国営農地開発事業関係遺跡　平成２年度発掘調査概要　２　左坂古墳群」(京都府教育委員会)　1991、87・88頁

肥後弘幸ほか　「国営農地開発事業関係遺跡　平成６年度発掘調査概要　１　エノボ横穴」(京都府教育委員会)　1995

注７　京都府教育委員会技師細川康晴氏の御教示を得た。

注８　古屋敷横穴墓の測量図については、公表された資料ではないが、野田川町教育委員会のご厚意により、掲載させていただいた。測量図については緊急発見の遺跡につき、図面および測量の精度は若干劣る可能性がある。野田川町教育委員会の下川賢司氏の御教示による。

注９　半田堅三「本邦地下式壙の類型学的研究」(『伊知波良』二)　1979

参考文献

①川嶋雅人ほか『多摩ニュータウン遺跡－NO.457遺跡－　本文編』(東京都埋蔵文化財センター)　1996

②谷口　榮ほか『五段田遺跡Ⅰ』(『都営西台三丁目団地建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』　東京都住宅局・円福寺西方(西台三丁目団地)遺跡調査会)　1986

③山本暉久ほか『神奈川県埋蔵文化財調査報告11　草山遺跡』(『秦野郡都市計画道路　秦野・二宮線街路整備にともなう調査』神奈川県教育委員会)　1976

④拙稿「国営農地(丹後東部地区)関係遺跡　平成８年度発掘調査概要　(2)シミズ谷城跡」(『京都府遺跡調査概報』第79冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1997　118～148頁